

Working Paper Series in Young Scholar Training Program

**Difficulties and Needs of LGBT Students at the  
University of Tokyo:**

**A Qualitative Focused-Group Interview**

Ryosuke Kobayashi, Jihye Kim and Yuma Sato

The University of Tokyo

April, 2018

No. 25

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター

Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research  
Graduate School of Education  
The University of Tokyo

# 東京大学において LGBT 当事者学生が抱える困難とニーズ —フォーカスグループインタビューを用いた質的研究—

小林良介 (東京大学)

金 智慧 (東京大学)

佐藤遊馬 (東京大学)

## Difficulties and Needs of LGBT Students at the University of Tokyo: A Qualitative Focused-Group Interview

Ryosuke Kobayashi, Jihye Kim and Yuma Sato  
The University of Tokyo

### Author's Note

Ryosuke Kobayashi is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo

Jihye Kim is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo

Yuma Sato is a Master student, Graduate School of Education, The University of Tokyo

This research was supported by a grant, Youth Scholar Program from Center for Excellence in School Education, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

### Abstract

世界的に多様化が進む今日において、性の多様性に関しても注目が集まっている。しかし、日本の教育領域において、LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender) の学生に対する十分な理解・対応がされているとは言えず、特に大学においてこれに関する研究もほとんどない状態である。そこで本研究では、研究者所属の大学に在籍するLGBT学生6名およびAlly学生1名に対して、大学におけるLGBT学生の困難やニーズに関してグループ・個別インタビューを行い、GTAを援用して分析を行った。結果として、LGBはコミュニケーションレベル、Tは生活全般で困難やニーズがあるという違いがあること、大学入学時からLGBTについて知る機会が重要であること、LGBTだけでなくハラスメントやマイノリティなど何かの一分野としてガイダンスする方が関わりやすいこと、などが明らかになった。

Nowadays human life has been more and more diversified all over the world and more attention has been paid to sexual diversity. However in educational field in Japan, it isn't supposed enough understanding and support is provided for LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender) students, and there are very few studies about the situation of LGBT students in especially universities. In present study, 6 LGBT students and one Ally student in the University of Tokyo participated in focused-group/individual interview and answered about their difficulties and needs at the university. The interview data was analyzed with GTA and the following results was revealed; there is a difference that LGB students have difficulties on communication level and T student has ones in general life, it is assumed to be important that every students should have opportunities to know about LGBT just after entrance into university, it is felt to be easier to provide guidance about not only LGBT but also one of more expansive knowledge such as harassment or minorities.

*Keywords:* LGBT, Focused-group interview, University

## 東京大学において LGBT 当事者が抱える困難とニーズ

### —フォーカスグループインタビューを用いた質的研究—

#### 1. 問題と目的

##### 1.1. 問題関心と先行研究の検討

近年、グローバル化が進むにつれ、あらゆる多様性に接する機会が増えている。性の多様性もさまざまな多様性の中の1つであり、LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender) に代表される性的少数者への関心・注目が世界的に高まっている。世界中の約 20%の国や地域が同性婚やパートナーシップ制度など同性カップルの権利を保障する制度を設けており (EMA 日本, 2018), アジアの中でも台湾では 2017 年 5 月に「同性同士での結婚を認めない民法は憲法に反する」という司法判断がなされ、今後 2 年以内をめどにアジア初の同性婚が成立する見込みである。日本でもこの数年間、東京都内で行われる性の多様性を訴えるレインボープライドパレードの規模拡大や、渋谷区・世田谷区・札幌市など複数の地方自治体におけるパートナーシップ制度の確立等、性の多様性が注目されつつある。しかしながら、それらは変化の一步として捉えられる反面、根本的な性の多様性に対する十分な理解には至っていないと考えられる。

日高ら (2014) による調査では、LGBT 当事者は 10 代から 20 代前半において自身のセクシュアル・アイデンティティの気づきと混乱を経験し、この時期のいじめ被害や不登校の経験率、自殺未遂率は異性愛者と比較して高いことが明らかになっている。また、当事者コミュニティに属することがかれらの自尊感情や精神的健康に良い影響を与えうること (三宮, 2014), 孤独感が内在化されたホモフォビア<sup>(1)</sup>やリスクの高い性行動につながりうるということ (DeLonga, 2011) も

分かっており、他者からの受容は当事者の精神的健康に関して重要であると考えられる。しかし一方で日本においては教職員の無理解や教職員に対する包括的な研修プログラムの乏しさも指摘されており (Human Rights Watch, 2016), 2015 年には LGBT 当事者の大学院生が周囲の無理解や大学側の不適切な対応のため自死するという痛ましい事件も起きた。つまり、非当事者の学生や教職員が LGBT 当事者に関する正しい知識を持っておらず、対応が十分ではないということが推測され、学校生活において LGBT 当事者が他者から受容されるための環境が整っているとは言い難い。

##### 1.2. 研究目的

そこで本研究では、大学生活の中で LGBT 当事者の学生が抱え得る困難やニーズの具体例を提示すると同時に、非当事者の学生や教職員が LGBT 当事者と接する際に感じる困難やニーズを明らかにすることを目的とする。また、それらの結果を基に、当事者それぞれの多様な性の在り方によって異なるニーズに対して大学側がどの程度対応できるかという実態を把握し、今後どのような多様性の教育が必要になってくるかを検討する。

現在、本学には性の多様性に関する学生サークルが二つ存在している。その一つは LGBT の当事者の交流を主とするサークル (UT-topos), もう一つは性の多様性を受け入れ、LGBT 当事者の学生がより安心して生活できる学校環境を調整することを目的としているサークル (TOPIA) である。TOPIA では、LGBT 当

事者以外に当事者を理解し、支援する立場の非当事者（Ally）の参加も認められており、LGBT当事者をサポートするためのさまざまな活動をしている。例えば、学園祭や東京レインボープライドでブースを出して、TOPIAの認知度向上とLGBTに関する啓蒙活動も実施している。また昨年度は、本学における多様なセクシュアリティのキャンパスライフを支援するという目的から、「できることガイド in 東京大学」という資料を作成・配布している。

しかし、「できることガイド in 東京大学」はLGBTの中でもトランスジェンダー学生のニーズに注目した内容がほとんどであり、他のセクシュアリティをもつ学生（レズビアンやゲイ、バイセクシュアル）の困難やニーズは十分に反映されていないように思われる。その点から本研究では、大学生活においてLGBTの当事者が抱く具体的な困難やニーズを明らかにし、それらに対して大学側がどのような対応が可能かということを検討する。本研究の知見を提示することによって、LGBT当事者が生活しやすく、多様性に開かれた大学環境を実現することが可能となりうる。

### 1.3. リサーチクエスト

- ・LGBT当事者は、大学生活においてどのような困難を持っているか
- ・LGBT当事者は、大学における周囲の学生・教職員に対しどのようなニーズを持っているか。
- ・LGBTそれぞれのセクシュアリティに独自の困難やニーズはあるのか。またそれはどのようなものか。

## 2. 研究方法

### 2.1. リクルーティング

研究協力者のリクルーティングは上述の UT-

topos と TOPIA に対して行った。UT-topos に対しては、代表者に研究依頼の許可を受けたうえで、メーリングリストにインタビュー協力者募集の文書を投稿した。TOPIA に対しては、東京レインボープライドで代表者に話をしたうえで、TOPIAのメールアドレスに研究依頼とインタビュー協力者募集文書を送った。結果として、ゲイ男性3名、レズビアン X ジェンダー<sup>(1)</sup>1名、パンセクシュアル<sup>(2)</sup>女性1名、FtM1名の計6名が集まった。この6名にA~Fの6つのアルファベットを割り振り、認識することとする。また、TOPIAに参加している研究協力者から非当事者を1名(Gとする)紹介してもらった。

### 2.2. 対象者

集まった研究協力者は以下の表の通りである (Table 1)。

Table 1

名前	セクシュアリティ	年齢	学部・研究科	学年	キャンパス
A	レズビアン X ジェンダー <sup>(2)</sup>	18	教養学部	1年	駒場
B	ゲイ男性	20	教養学部	2年	駒場
C	FtM	23	工学部	4年	本郷
D	パンセクシュアル <sup>(3)</sup> 女性	21	工学部	4年	本郷
E	ゲイ男性	22	工学部	修士1年	本郷
F	ゲイ男性	25	工学部	修士2年	本郷

G	異性愛男 性	22	農学部	3年	弥生
---	-----------	----	-----	----	----

### 2.3. データの収集

データの収集は半構造化インタビューによって行った。すべてのインタビューは教育学部棟内のプライバシーが保たれた個室で行った。

#### 2.3.1. フォーカスグループインタビュー

LGBT 当事者の 6 名を日程の都合上 3 名ずつ 2 グループに分け、協力者 3 名と研究者 3 名（いずれも LGBT 当事者）の 6 名が集まり、「大学生活における LGBT 当事者の困難やニーズ」について約 2 時間の半構造化のフォーカスグループインタビューを各グループ 1 回ずつ行った（約 2 時間）。グループ分けに関しては、セクシュアリティに関してはなるべくばらけるようにし、キャンパスや学年に関しては近い人同士を固めた。

#### 2.3.2. 個別インタビュー

フォーカスグループインタビューに参加した協力者それぞれに対し、フォーカスグループインタビューに参加した感想や気づいたこと、またフォーカスグループインタビューでは言えなかったこと等について個別インタビュー調査を行い、各セクシュアリティ独自の困難やニーズについてより具体的に聴取した（約 1 時間）。

また、非当事者に関しても個別インタビューを行い、Ally になった経緯や LGBT 当事者と接するときの考え、大学全体が LGBT にとって過ごしやすい環境になるためにはどうすればよいか等を聴取した（約 1 時間 30 分）。

### 2.4. データの分析

得られたインタビューデータをもとに、

GTA (Strauss & Corbin, 2008) を援用して分析を行った。まず、語りを意味内容ごとに分割し、見出しをつけた。見出し付けの作業は研究者個別で行い、そのあと見出しの妥当性に関して研究者全員で検討した。その見出しをもとに、カテゴリーに分類し、小・中・大カテゴリーへと抽象度を高めていった。浮かび上がったカテゴリー同士の関連性を検討し、カテゴリー関連図を構築した。カテゴリー化や関連図構築の作業も研究者全員で合議して行い、妥当性の向上を図った。

### 2.5. 倫理的配慮

本研究は事前に東京大学の倫理審査を通したうえで行った。調査の際は、調査内容および協力の任意性や中断の自由について十分にインフォームド・コンセントを行った。インタビュー調査を行う際は、研究協力の同意書に署名してもらい、同時に同意撤回書を渡した。性別違和などの理由から名前を明かしたくない人もいる可能性を考慮し、同意書に関しては本名ではなくても良いとし、インタビュー中は何と呼んでほしいかを聞いてからインタビューを行った。ただし、謝金の関係で銀行口座情報と口座名義を知る必要もあったため、事前に説明をして同意を得たうえで、封筒に入れてもらう、少し離れた場所で記入して裏返して渡してもらうなど、必要最低限の人しか個人情報を見ないように配慮した。特に LGBT 当事者を対象に調査を行う際は、アウティング<sup>(4)</sup>の危険性も考慮し、プライバシーが保たれた個室を用意した。調査者のセクシュアリティが調査に影響する可能性を考慮し、協力者の特性に応じて柔軟に対応した。分析の結果はフィードバックを行い、協力者からの意見を反映させた。

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 調査協力者の個人史

まず、LGBT 当事者の調査協力者が大学入学後、どのような経緯をたどって今に至るかについて、1人ずつ簡単にまとめて以下に示す。

##### Aさん (レズビアン X ジェンダー)

入学後、クラス内に、男性と女性が当たり前のよう恋愛関係になるという異性愛を前提とした雰囲気があった。クラス内の恋愛の話を持ち掛けられても、レズビアン・X ジェンダーであるため、異性愛の恋愛に共感できず、女子同士の服装やメイクに関する会話にも入り込めなくて、居心地の悪さや面倒臭さを感じていた。それゆえクラスではあまり踏み込んだ話はしないが、サークルで仲良くなった男性にカミングアウトをして理解されたり、UT-topos に参加し始めたりすることで、より自然体で話せて居心地の良い空間や交友関係を見つかることができている。

カミングアウトに際しては、「そうなんだ」とさらっと流して話を続けてくれるくらいが、相手に知識や理解があると感じて心地よく、実際そのように対応してくれた友人や教員もいた。ただ、X ジェンダーであることを説明しても理解してもらえないことも多く、男女二元論に基づくと、それから漏れた存在である自分はいないものとして扱われてしまうと感じている。理解は難しいかもしれないが、男女二元論でとらえられない人もいるということを知ってほしいと思っている。

インタビューを通して、最低学年ということでまだわからなかった部分を知ることができたと、セクシュアリティと大学について言葉にすることで改めて考える機会となり、良い経験だったと語った。

##### Bさん (ゲイ男性)

Bさんは、グループインタビューを通して、ゲイであることによる困難だけでなく、ゲイであることの恩恵について気づくことができたと語る。ゲイであることからマイノリティについて考えることができるという意識と、LGBT の中でもゲイである自分は、こと東京大学においてはマイノリティの中でのマジョリティであり、性自認の違和感もないため大学内の制度面において特別な不利益を被ることはない、いわば特権的な立場に立っており、今となっては困難もそんなに感じないと気づいたという。

このような B さんの困難感の少なさの背景には、UT-topos への参加が大きく関係しているようである。Bさんは、中高校時代や大学入学当初は同じゲイの友達が見つからず、クラスに馴染めなさや居心地の悪さがあったが、大学に入って UT-topos に参加してから悩みを共有できる仲間や居心地の良い場所を見つかることができたと語っている。UT-topos に参加する中で、アウトイングの危険性はあるものの、それ以上に仲間と普段はできないような会話ができること、さまざまな情報を共有できることは、当事者にとって大きな支えになると捉えていた。並行して仲を深めたいと思う非当事者の友人にもカミングアウトをしており、「距離を置かれるより素直にわからないことを聞いてくれるのが嬉しい」と語る。現在、学外の LGBT サークルにも参加し、積極的に当事者達との交流を行っている。

一方で、学校内の非当事者に対してわかってほしいこととしては、メディアからの間違った情報や、「性自認と性的指向」の軸を持って LGBT 当事者を捉えてほしいこと、セクシュアリティは LGBT に関係なくプライバシーの一部であると考えてほしいということが語られている。そして、その

ためには学校内においてより細分化された困難やニーズに対応でき、かつ誰でも気軽に利用できるように施設や資源が必要になってくるだろうと考えていた。

### Cさん (FtM)

大学入学前から UT-topos の存在を知っており、入学してすぐに参加を始めた。その中でサークルの先輩から在学中に学生証の名前を変えられると知り、2 年時から 3 年時への進学振り分け(以下、進振り)のタイミングで名前を女性名から男性名へと変更し、現在は学生証の性別は女性のままだが男性として生活している。学科のメンバーは進振り前後でほぼ一新されたので、カミングアウトをすることなく、進振り前は女性として、進振り後は男性として周囲から認識されている。別のセクシュアリティとは関係のないサークルでは、メンバーには進振り前後でカミングアウトをしないと自身の性別移行に際して混乱を招くことが予想されたため、話す必要があるメンバーを 1 人 1 人呼び出して事情を説明したうえで、外部に漏れないように協力をお願いした。

名前変更の際は、大学で統一した手続きがなく、学部間の連携が不十分であったため、進振りまでに名前変更が間に合わないのではという危機感もあり、変更後も関連施設との情報共有が不十分で手間やアウトティングの危険性を感じている。成人しているものの変更申請の際に親の承認を求められ、十分な理解が得られていない親との交渉の必要性があったと言う。また、性別に関しては戸籍上の性別変更が済んでいないため学籍上も変えられないという大学側の判断であった。

変更手続きの際の大学側の対応の不十分さの一方で、困難やニーズについて聞かれたりもしており、大学側の「対応しよう」という気持ちも感

じられたと言う。UT-topos だけでなく TOPIA にも参加しており、大学内の LGBT 当事者の生活をよりよくするための活動も行っている。

### Dさん (パンセクシュアル女性)

大学 1 年か 2 年の夏から UT-topos に参加し始めた。1, 2 年の駒場キャンパス時代は UT-topos のランチ会<sup>6)</sup>にも参加していたが、3 年生以降、本郷キャンパスに移ってからは学科のメンバーと過ごすことが多く、研究室とランチ会会場が遠くなったこともあり、ランチ会は行っていない。自身の性自認に関して X ジェンダーと名乗っていた時期もあるが、今は女性と自認している。男女の区別をつけたくないという考えがあり、UT-topos ではパンセクシュアルと名乗っている。

進学先の工学部では大多数が男子学生と男性教員である。男性教員の中には、「女子は機械に向いていない」「将来お嫁さん取るときに」などの発言や、波動・振動の授業で女性の胸の揺れ方を題材にするなど、LGBT 以前に、少ないながらも存在することはわかっている女子学生への差別的発言や存在を無視するような発言が見受けられたと言う。また、「女子がいると華やかだから」「女子学生が入ったら優遇する」という男女を区別して扱いを変えるような教員の発言にも違和感を抱いている様子である。

カミングアウトに関しては、一緒に恋愛の話など深い話をして仲良くなりたいからというきっかけですることが多い。教員と比べて学生に対してはそこまで理解してもらおうという期待もなく、それゆえ要望も特にはない。特に男女の区別なしに人を好きになるというパンセクシュアルの感覚は理解されるのが難しいと感じる。ただ、知識として知っておいてもらえると配慮につながるのではないかと語る。ジェンダー系の授業



は、広く浅くの授業だと面白可笑しく言う人もいるのではないかと思って受講しなかった。もっと深い内容で本当に興味があって受講している受講者のみの講義になら参加してみたい。

グループインタビューの感想で、「自分は男女ともに実際経験がなく、当事者と名乗ってよいのか」と躊躇われる場面もあった。

### Eさん (ゲイ男性)

学部 1, 2 年生の駒場キャンパス時代は、今よりもゲイアイデンティティの自己受容が進んでおらず、自己肯定感が揺らいでいた時期であった。当時所属していたサークルやクラスにおいて異性愛前提の話が出たりすると、あまり会話に入らないうちに行かず、「異性に興味がない人」という立ち位置でやりすごしていた。2 年時に UT-topos に入り、同じ LGBT の人たちとの交流の機会ができたこと、進学振り分けでの進学先の学科は男女共学のような雰囲気ですこまで異性愛前提の雰囲気になかったこと、キャンパスも変わりサークルとの関わりが減ったことなどのタイミングが重なり、大学生活でのつらさが軽減していったという。特に UT-topos に入ったことの影響は大きく、UT-topos の活動への参加を経てゲイである自分に対して肯定的になれたと語っており、それから徐々に周囲の人へのカミングアウトをするようになったという。現在の学科にはカミングアウトしている人もいるが、同じ研究室内でカミングアウトしている人はいない。本郷キャンパスに移ってからは、ドライな人間関係ではあるが、自分で居心地がいい場所や関係性を積極的に選ぶことができおり、現在セクシュアリティに起因する困難は特に感じていないとも語る。

カミングアウトに関しては、身近な人には話すようにしているが、基本的には自分のことを知ら

れてもいい人、知られたくない人で相手を判断しておこなっているという。また、ゲイであることを知られるのはいいが、そのことで揶揄されることは避けたいという気持ちが強く、むやみにカミングアウトしないように気を付けている。

非当事者学生や学校関係者に対しては、結婚して家庭を作るといった、一般的な将来観や価値観で物事を考えないでほしいと言い、世の中にはさまざまな人が存在していることを知ることで、LGBT だけでなく、それぞれ異なった考え方や価値観を持つ人々を理解することができるだろうと思っていた。

今回のインタビューを振り返り、同じ LGBT でもそれぞれの境遇が異なっていることや自分が困っていることすら気づいていなかったことに気づき、さまざまな意見があっているんな当事者達の考え方や感じ方に触れたい機会であったと語っている。

### Fさん (ゲイ男性)

保守的な男女役割の固定化が強い地元でストレスを感じ、上京してきたという経緯があり、大学 3 年時から UT-topos へ参加している。

人の考え方や価値観はさまざまであり、必ずしも正しい何かがあるわけではないと考えており、周囲の LGBT に関する知識や理解が高まることを望みつつも、LGBT 当事者から非当事者学生や大学側に多くを要望することにはやや消極的な様子である。それゆえ、明らかな差別を除き、多少 LGBT に配慮のない言動があったとしても、基本的には受け流す姿勢を取り、非当事者の話に合わせないと申し訳ないような気持ちも持っている。一方で、UT-topos とは別のサークルでは、非当事者のことが好きになり、その態度で F さんがゲイではないかという噂が流れたことがあり、それは

嫌だったと語る。結局その噂はずっと否定し続けていた。カミングアウトをして自分の秘密を負わせることに関しても申し訳なさを感じており、カミングアウトをせずとも自分がゲイだと理解してくれるゲイコミュニティに居心地の良さを感じている。

LGBT センターに関しては、そのような場所ができてアウティングを気にして利用しないとすると語り、UT-topos のような当事者だけが交流できるような空間に関してもっと情報がわかりやすくなってもいいのではないかという意見を持っていた。

### 3.2. GTA による結果と考察

#### 3.2.1. カテゴリー表

以下に、カテゴリー分析によって得られた第カテゴリー、中カテゴリー、小カテゴリーを示す (Table 2)。

Table 2

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
異性愛コミュニティでの体験	カミングアウト	受け容れてもらえる
		わかってもらえない
	コミュニケーションレベルの困難	クラス・サークルでの居心地の悪さ
		教員の配慮のない言動
	制度面での困難	事務手続きの統一不足
		トイレ等の制限

LGBT 当事者サークルでの体験	サポート	居心地の良さ 情報共有	
	問題点	アウティングの危険性 広報の難しさ	
		差異	セクシュアリティ間の差異
ニーズ	コミュニケーションレベルのニーズ	LGBT の存在を知ってほしい 差別的言動をやめてほしい	
		制度面でのニーズ	ガイダンス 授業 センター設立 事務手続きの統一化
	東京大学の独自性	キャンパスが分かれている	当事者サークル活動の不便さ
		男女比の不均衡	当事者サークルでゲイばかり クラス・サークルで男子ばかり
男性教員が多い			
進学振分け	人間関係が		

	制度	新しくなる
		凝集性が弱まる

の際や変更後の対応が統一的なものではないと感じる部分が多く、手間がかかるという意見が得られた。

また、カテゴリー分析の結果の全体像を以下に示す (Figure 1)

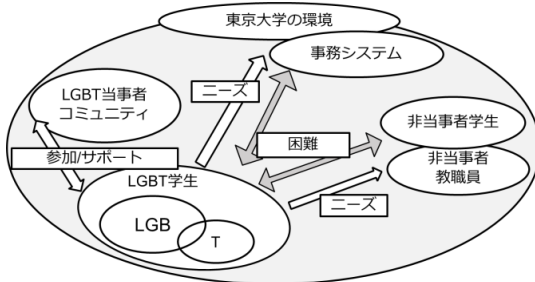


Figure 1

以下では、このカテゴリー分析の結果に基づきながら、得られた考察を1つ1つ説明する。

### 3.2.2. 大学生活における

#### LGBT 当事者のもつ困難

まず指摘されたのが、LGBT に関する困難としては、特に駒場キャンパスで生活する1, 2年生のころはクラスやサークルという集団に属するという機会が多く、その集団の凝集性が高いため、恋愛に関する話題が出やすい。そこで出る恋愛話というのはマジョリティのシスヘテロ(自分の身体的性別に違和感がない異性愛者)を前提としているため、価値観が合わず居心地があまりよくないということが複数人から語られた。また、自分のセクシュアリティについて疑いをかけられたり、自分本人が何か言われたわけではないが他の人がLGBTの人たちを揶揄して話しているのを聞いたりするという経験も嫌なものとして体験されていた。さらにトランスジェンダーに関しては、在学中に名前・性別・学生証などを自分の希望するものに変更する際の情報がわかりにくく、変更

### 3.2.3. 大学組織の横のつながりの不足

先述の T 当事者の困難の部分で、学部間で対応がまちまちであり、学部間あるいはキャンパス間での情報共有の連携が取れていなかったり、統一的な対応が整っていないような印象を持ったという語りがあった。学生証の名前を変えたことで図書館に入れなくなり名前を変えたことをスタッフに知られてしまったり、名前は変更したが性別は変更していないため健康診断のときはその都度問い合わせをしないとイケないなどの不便さも感じている。各学部やキャンパスで対応の足並みをそろえるとともに、図書館や保健センターなど情報共有が必要な場合は事前に連携することが必要であると考えられる。

### 3.2.4. LGB と T の違い

同じLGBTでも、性的指向のマイノリティであるLGBと性自認のマイノリティであるTでは困難やニーズの質も度合いも異なっている。カミングアウトに関する語りで、LGB当事者からは「もっとその人と仲を深めたいとき」にカミングアウトするという意見が多かったのに対し、T当事者からは「必要性に応じて切羽詰まって」カミングアウトしたという意見があった。LGBに関してはコミュニケーション上での居心地の悪さや嫌な体験というのはあるものの、生活レベルで何か困るといことは少ないように思える。一方T当事者はトイレや着替え、合宿、掲示物の名前や性別欄、教員からの呼称など生活レベルでの困難やストレスが多いため、カミングアウトに際しても「相手との仲を深めたいから」というより「生活

するうえで相手の協力が必要だから」というモチベーションでしたということである。カミングアウト時の相手の反応に関しても、LGB 当事者からは「あまり特別視したり重い感じで受け取ってほしくない」という意見があったのに対し、T 当事者からは「けっこう真剣に聞いてほしい。1人1人呼び出して話した」という意見が得られた。

また、先述の不均衡な男女比に起因する問題の中で、何かしらの「女性」セクシュアリティをもつ LGB 当事者の方が、本大学においてはより大きなストレスや困難を抱えていると考えられる。このように、同じセクシュアルマイノリティとまとめられていても、実際に抱えている困難やニーズが異なるということがうかがえる。

### 3.2.5. 交友関係の取捨選択と

#### 当事者コミュニティの意義

クラスやサークルで、特に恋愛話などマジョリティの性に関する価値観が共有されている空間に居心地の悪さを感じたときは、特に仲の良くカミングアウトしても自分を受け入れてくれる友人との間や、UT-topos という当事者サークルの中に自分の居心地の良い場所を見出しているという語りはほとんどの人から得られた。つまり、大学内のどこかのコミュニティでの居心地が悪くても、自分の本音を話せる別の交友関係やコミュニティを選択するという対処を取っている。その点において、クラスというコミュニティの凝集性が強く、クラス以外のコミュニティがあまり存在しない中学高校と比べて、大学に入ってからの方が自分の居心地の良い交友関係を取捨選択できると考えられる。特に本郷キャンパスに移った後は、クラスやサークルという凝集性が高く恋愛ムードが強いコミュニティ要素が薄まり、お互い深く干渉しあわない個人個人の時間や空間が相

対的に多くなるため、より自分の居心地の良い交友関係を取捨選択しやすいとも語られている。

逆に、UT-topos という当事者サークルがなかった場合、自分の悩みや本音を話せる相手がいなくてつらかったと思うという意見も語られた。相手が自分のことをよく知らなかったり初対面だったりした場合、自分が LGB だと知ってもらうことは難しく、マジョリティを前提に話される機会も少なくない。そういったマジョリティ前提の話のある程度「しょうがないもの」として聞き流すことのできるスキルも、過度にストレスをためないために重要であるように感じられ、そのためにもそういった経験を共有し理解してもらえる当事者コミュニティが大学内にあることは重要であると考えられる。

### 3.2.6. カリキュラムやガイダンスで

#### 早いうちから

LGB に関して知識がなく、LGB 当事者が近くにいるにもかかわらず、それに気づかず差別的な発言をしたり、異性愛者で自分の身体的性別に違和感を持っていないことが当然であるかのような発言をしたりするケースは少なくない。「ジェンダー論」などジェンダーや LGB に関する講義も開講されているが、そこに受講する学生はもともとそういったものに関心が高い学生が多く、それ以外の多くの学生に対してはジェンダーやセクシュアリティに関して深く議論したり、性的マイノリティについての正しい知識を得る教育の機会が用意されていないと考えられる。日高ら(2014)を踏まえると、10代や20歳前後の若い学生は自身のセクシュアリティに関して模索していたり、自身の性的マイノリティを受容しきれずにいる人が多いと考えられ、入学時のガイダンスで薬物や宗教勧誘に加えて性に関するハラスメ

ントの文脈などで LGBT についても簡単に触れられると良いのではないかという意見も上がった。また、「ジェンダー論」など選択科目でのカリキュラムではなく、LGBT を含めた多様性やマイノリティ、ハラスメントなどについて扱う必修あるいは準必修のカリキュラムを作ってもよいのではないかという考えも語られた。「自分の身の回りにも LGBT 当事者はいる」ということがわかっていれば、不用意な差別的発言は減る可能性が考えられる。また、カミングアウトを受けた非当事者の学生がどのように対応すればよいのかなどの具体例などがわかっていると、カミングアウトをした側もされた側も安心できうると考えられる。

### 3.2.7. 性に関する専門施設の賛否

例えば、米国の主要な大学には LGBT センターと呼ばれる、LGBT 当事者が交流できるコミュニティに関する情報や、LGBT を含めた性の多様性に関して議論できるスペースを提供したり、性に関する相談窓口を紹介したりするスペースや施設が設置されている（小林ら、2017）。日本でも早稲田大学でスチューデントダイバーシティセンター内に GS（ジェンダー・セクシュアリティ）センターが 2017 年 4 月に設立され、性に関する様々な情報提供とサポートの体制が整いつつある。こうした LGBT センターあるいはジェンダーセンターが本学にも必要なのではないかという意見も見られた。問題背景に挙げたように、2015 年に一橋大学で LGBT の大学院生が周囲の無理解や不適切な対応によって自死した事件は記憶に新しい。その事件で問題となった要素の 1 つとして、大学内に適切な相談窓口が存在せず、適切でない対応をされたことで当人をさらに追い詰めることになった可能性が考えられている。イン

タビューの中でも、ジェンダーや LGBT に関する専門的な知識をもった相談員が常在し、性に関する相談をすることができ、LGBT 当事者コミュニティに関する情報や性別違和により名前や性別を変更する際のシステムに関する情報を提供できるようなセンターがあると良いのではないかという語りが得られ、こうした性に関する専門的なスペースや施設の必要性は少なくないと考えられる。

一方で、「LGBT センター」のように LGBT を銘打った場所を作っても、そこに出入りすることが事実上のアウティングになるのではないかという意見もあり、LGBT センターができたとしても行かないかもしれないという意見も見られた。情報を必要としている人が適切な情報を得られる体制は重要であるが、目立った形で LGBT を掲げられると利用しづらいという難しさもうかがえる。

### 3.2.8. LGBT だけではなく、何かの一部に

この難しさに対応する 1 つの手段としては、もう一段階広くくりの中で LGBT を位置づけ、その広くくりの中で情報や居場所を提供するというものが考えられる。「LGBT センター」よりも「ジェンダーセンター」と一段階抽象度をあげることで、LGBT 当事者だけが利用するという事態を避ける意図である。あるいは、ダイバーシティセンターを作って、そのマイノリティの中の 1 つとして LGBT を組み込んだり、ハラスメント相談室や学生相談室の中に性的マイノリティに関する部門を作ったりという手段もありうる。上述のガイダンスやカリキュラムにおいても、ハラスメントに関する注意事項として、マイノリティに関する講義の中で LGBT について扱うなど 1 つ抽象度を高めた方が、LGBT 当事者にとって安心し

やすく、利用しやすいのかもしれない。どのように LGBT 非当事者に対し最低限の知識を提供し、居場所やサポートを必要としている LGBT 当事者に対し必要な情報を提供するのかが、さらなるデータの収集と分析が必要であると考えられる。

### 3.3. 非当事者の意見

本研究では非当事者の調査協力者は 1 名しか集めることができなかった。そのため、この 1 名だけの意見を非当事者の考えに一般化することはできないが、以下に簡単に触れておく。まず、LGBT 当事者と実際に関わったり知り合ったりできる機会やイベントを大学側が用意したり案内すると、非当事者学生の LGBT への関心や理解につながるのではないかという意見が見られた。また、就職活動の関連で、多様性を重視する (Equality Ally) 企業の説明会を大学側が用意すると、LGBT だけでなく、女子学生や留学生などいろいろな人にとって働きやすい職場の情報が見られるのではないかという考えも語られた。

### 3.4. 本研究の限界

まず、本研究の限界点として、研究協力者の数が少ないこと、それに伴いサンプルに偏りが出てしまったことが挙げられる。また、今回募集に応じてくれた研究協力者は当事者サークルに比較的にコミットしている者であり、サークルに属していない当事者には話が聞けなかった。したがって、本研究の結果は東京大学の中の比較的サポートが得られている LGBT 当事者の個別事例であり、日本全体の LGBT 当事者の意見として一般化することはできないと考えられる。

また、今回の研究では非当事者にもインタビューを実施したが、1 名のみしか集めることができなかった。その 1 名も TOPIA に所属する LGBT に

理解のある非当事者であり、一般的な非当事者学生の意見とは言えない。大学全体の環境を考える上で、多数派である非当事者が LGBT に関してどう考えているか (あるいは考えていないか) は重要であり、その点に関してもさらなる理論的サンプリングが必要であると考えられる。

また、当事者・非当事者に共通して、リクルーティングの難しさを感じた。当事者にとって研究参加はアウトティングにつながりうるリスクなものでありうるし、非当事者にはそもそも興味を持ってもらえていない可能性もあり、その点は今後研究を進めていくうえでの課題となりそうである。

### 3.5. 今後の展望

以上の限界点を踏まえながら、さらなるインタビュー調査を行い、LGBT 当事者の困難やニーズについて明らかにしていく。その結果をもとに、LGBT の学生たちが学校生活を送るうえで生じる困難を相談でき、また何らかの支援が得られると期待される学生支援課・教務課・学生相談室・バリアフリー支援室・ハラスメント相談所などの職員に話を聞きに行く。その中で、LGBT 当事者のニーズに関する学校側の意見や、現時点においてどの程度対応が可能であるか、また当事者に関してどういうことを知りたいのか等についての語りを得て、大学全体が LGBT に対して受容的な環境になっていくために参照できる知見をまとめていく必要があると考える。

#### 注

- (1) 内在化されたホモフォビア：当事者自身が抱いてしまう、同性愛者に対する偏見や差別感情
- (2) X ジェンダー：自身の性自認が男性か女性か決められない、決めたくない、わからない状態や

人のこと

(3) パンセクシュアル：恋愛感情を抱く相手の性別を区別するバイセクシュアルと異なり、恋愛感情を抱く相手の性別を区別しないあり方や人のこと

(4) アウティング：本人の意図に反して自身のセクシュアリティに関する情報が他者に伝わってしまうこと

(5) ランチ会：一緒にご飯を食べることが目的というよりざっくばらんにおしゃべりする空間として機能している

## 引用文献

Corbin, J., & Strauss, A. (2008). *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage

DeLonga, Kathryn., Torres, Hector., Kamen, Charles., Evans, Stephanie., Lee, Susanne., Koopman, Cheryl., Gore-Felton, Cheryl. (2011). Loneliness, Internalized Homophobia, and Compulsive Internet Use: Factors Associated with Sexual Risk Behavior among a Sample of Adolescent Males Seeking Services at a Community LGBT Center. *Sexual Addiction and Compulsivity*, 18(2), 61-74.

EMA 日本 (2018). 世界の同性婚 EMA 日本 Retrieved from <http://emajapan.org/promssm/%e4%b8%96%e7%95%8c%e3%81%ae%e5%90%8c%e6%80%a7%e5%a9%9a> (2018年1月19日)

日高庸晴 (2014) LGBT 学生の存在を考える：キャンパス内でのダイバーシティ推進のために, 大学時報, 63(358), 76-83.

Human Rights Watch (2016). 「出る杭は打たれる」

日本の学校における LGBT 学生へのいじめと排除, Human Rights Watch.

小林良介・松下弓月・川上侑希子・佐藤遊馬・福崎咲綾・金智慧 (2017). LGBT に関する大学風土の日米比較検討 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 40, 70 - 77.

三宮愛 (2014). 女性同 (両) 性愛者のコミュニティ参加は精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか-面接法と質問紙調査による検討-, 女性学評論, 28, 133-161.

東京大学 TOPIA セクシュアルマイノリティ・LGBT + 支援サークル@東京大学 (2018). できることガイド IN 東京大学-ジェンダー・セクシュアリティとキャンパスライフ Retrieved from [https://topiaut.wordpress.com/possibilities\\_guide/](https://topiaut.wordpress.com/possibilities_guide/)

Copyright © 2010-2018 Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research  
Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター

Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research,

Graduate School of Education, The University of Tokyo

WEBSITE (日本語) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/>

WEBSITE (English) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/en/>

